

### ムガル帝国の分裂

すでにNo.90で学んだように、第3代アクバル(位1556-1605) → 第4代ジャハーンギール(位1605-27) → タージ=マハルの建設で名高い第5代シャー=ジャハーン。その三男が、第6代【1: 位1658-1707】である。

- 1) 【1】は、兄弟との闘争に打ち勝ち、父王を幽閉して帝位を獲得した。外征に専念して最大の領土を得た。しかし、財政は悪化、反乱が起き、帝国衰退の原因をつくった。彼は厳格なスナ派であり、ヒンドゥー教徒、シーア派ムスリム等を弾圧、その寺院を破壊した。現代の表現を借りると「原理主義者」とも言える。非現実的なまでに厳格で、第3代アクバル位1556-1605の時以来、廃止されていた、ヒンドゥー教徒など異教徒(ジンミー)に対する【2: 位1674-80】を1679年に復活させ、ラージプートとの協力関係を崩してしまった。なお、都はデリーである。

ちょうど同時期の17世紀半ば以降、以下に見るように衰退するムガル帝国から離れて台頭する地方勢力と手を組みつつ、オランダ、イギリス、フランスが商業権益を巡る熾烈な抗争を展開した。最終的勝者はイギリスである。

- 2) マラータ王国(1674-1818) ……マラータ同盟(1708-1818)と区別すること!  
 アウラングゼーブ帝時代に【3: 位1674-80】がデカン高原に建国したヒンドゥー国家。10W  
 ムガル朝と戦い(それはマラータ戦争とは呼ばない!)、18世紀に北インドの大半を征服した後、有力諸侯のゆるやかな連合体(マラータ同盟、形式上は1708-1818)になった。

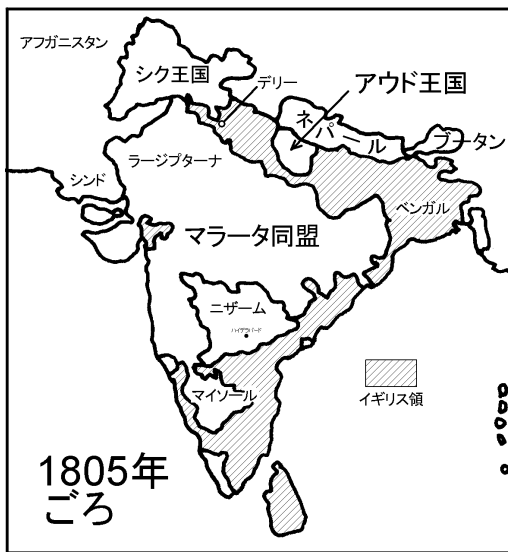
後に、マラータ戦争で【4: 位1674-80】に破れ、イギリスの支配下にはいる。(後掲)

- 3) 北西インドの【5: 位1674-80】の反乱(それはシク戦争とは呼ばない!)  
 シク教: 16世紀初頭、【6: 位1469-1538】がイスラーム教の影響のもとにヒンドゥー教を改革した教えで、パンジャブ地方に広まった。偶像崇拜やカーストによる差別を否定し、神秘的な教義を持つ。

ムガル帝国の激しい弾圧に対抗してシク教団は軍事集団化した。特にアウラングゼーブには、教主(ナーナクではない)が犠牲となるほど激しい迫害を受け、反乱を起こした。

ムガル帝国の弱体化とともに、北西インドのパンジャブ地方に独立王国を建てた。

19世紀中ごろ、【7: 位1674-80】でイギリスに敗れ、その支配下に置かれた。(後掲)



- 4) アウラングゼーブ帝の死(1707)後、諸勢力が自立する傾向を強め、特に、ムガル帝国で宰相をつとめたアーサフ=シャーがデカン高原にニザーム王国(ハイデラバード王国、首都ハイデラバード)を建てた1724年以降、帝国は解体に向かった。ベンガルの太守も自立化し、南インドでは、17世紀初頭にマイソール王国(ヒンドゥー教の地方政権)が急成長した。

1739年にイランのアフシャール朝の侵攻を受け、デリーを占領され、虐殺・略奪などで甚大な打撃を蒙った。このとき、多くの財宝とともに、シャー=ジャハーンの「孔雀の玉座」も奪われた。これにより、ムガル帝国の権威は地に落ちた。ガンジス川中流域では、アワード(アウド)王国が1754年事実上独立。アフガニスタンに成立したドゥッラーニー朝も帝国の領土に何度も侵攻し、これを撃退するためにはアワード王国の力を借りた。

マラータ王国やシク教王国がムガルの領土を切り取ったうえに、イギリス領も拡大を続け、ムガル朝はデリー周辺のみ的小国に転落した。

英領の拡大を見よ!



### 地方の時代

以上に見た地方諸勢力の拡大は各地方の経済発展が背景にあった。

以下の1)2)は右図にマークして位置を確認せよ。

- 1) 三大政治都市……【8: 位1674-80】、アグラ、ラホール  
 宗教都市も発達、農産物流通市場も発達。  
 2) 商品作物の栽培と加工 → 大都市の需要、西欧への輸出  
 グジャラート、ベンガル、タミル……綿  
 デリー南方……インディゴ(藍)  
 ベンガル……砂糖

こうして、地域独自性の強い今日のインド諸州の枠組みが形成されていた。

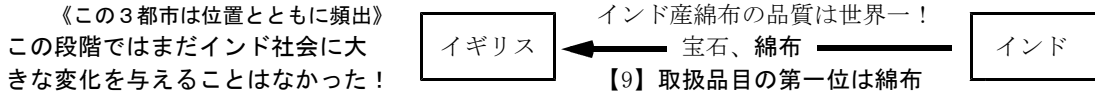
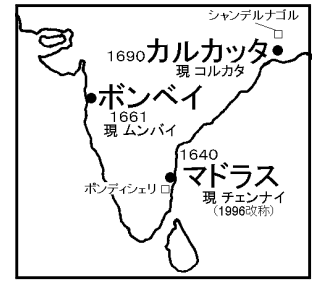
- 3) モスリン、キャラコ、サラサ等の高級綿織物が国際商品として生産された。イギリス・フランスなどヨーロッパ諸国の東インド会社は、ムガル帝国の許可を得て各地に商館を建設し、商業活動を展開。彼らがインドで購入した商品の中で最も重要なのはこれら各種の綿布である。その購入のために持ち込まれた大量の金・銀が、農業生産物(現物)の分配を基礎としていたインド社会を根底から揺るがした。

# イギリスのインド支配の拡大

以下、ⅠⅡⅢの3期に分けて述べる。この時期区分は著者独自のもの。

## 第Ⅰ期 17世紀 貿易拠点の確保

- 1) 1600年、【9】 **東インド会社** 創設。この時の国王はエリザベス1世。  
 【9】はインドに限らずイギリスのアジア侵略の実行部隊。  
 1623年 **アンボイナ事件**。これ以降イギリスはオランダが支配するモルッカ諸島から撤退、インドに専念。 **東インド会社**は1602年創立。  
 1640年 【9】は**マドラス**（現チェンナイ）に要塞と商館を建設。  
 1661年 【9】は**ボンベイ**（現ムンバイ）を確保。  
 1690年 【9】は**カルカッタ**（現コルカタ）を確保。



### 《ライバル、フランスの動き》

- 1664年 **フランス東インド会社**再組織（1796年解散）……財務総監**コルベール**による 09M  
 創立は1604年（アンリ4世） イギリス、オランダに半世紀以上遅れをとった
- 1673年 **ボンディシエリ**を確保  
 1674年 **シャンデルナゴル**を確保

マドラス（英）とボンディシエリ（仏）は南部、カルカッタ（英）とシャンデルナゴル（仏）は東部。ともに17世紀に建設された。

## 第Ⅱ期 18世紀から19世紀前半 次の1)2)3)がほぼ順次に進行。3)はNo.150

英領インドの基礎を築いた**ロバート=クライブ**（1725～1774）とフランス領インド総督**ジョゼフ=フランソワ=デュプレクス**を知っておこう。商人の家に生まれたデュプレクスは1720年ボンディシエリのフランス東インド会社に入社。1742年にはボンディシエリ総督に任命され、1740年に始まったオーストリア継承戦争ではイギリス東インド会社に対して優勢に戦いを進め、1744年、英領マドラスを占領。イギリスの名門の生まれながら学業成績は悪く学校を転々とした**クライブ**は1743年18歳でイギリス東インド会社の最下級の書記として入社、翌年マドラスに赴き、デュプレクスがマドラスを占領したため捕虜となったが脱出に成功。1747年英軍将校に任命され、1751年にはマドラス西方の仏軍要塞**アルコット**を占領した。一方、デュプレクスはインドでの出費を嫌うフランス政府に1754年解雇され、1763年パリで貧窮のうちに亡くなった。1757年、クライブは600人のイギリス兵、800人のシパーヒー（インド人傭兵）、500人の水兵を率いて34,000のベンガル太守軍をブラッシーの戦いで破った。この勝利によってベンガルにおけるイギリスの覇権が確立する。1765年には初代ベンガル知事に就任。ムガル帝国皇帝からイギリスのベンガル支配を公認する勅書を受ける。これによって英領インドの基礎は完成した。

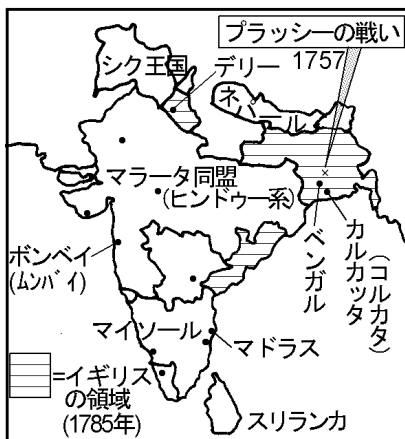
- 1) 18世紀、3次にわたる【10】 **七年戦争**（1744-47・50-54・58-61）で**フランス**を破り、東インド会社のマドラス管区を拡大し付近の諸侯も圧伏。

**七年戦争**の開戦と同年の1756年、フランスと同盟したベンガル太守がカルカッタを奪取した。1757年、イギリスは、優勢なフランス・ベンガル太守連合軍を、【11】 **ブラッシーの戦い** ※で破り、フランス軍は撤退した。

※ 英軍の指揮は東インド会社**クライブ**。クライブは採用時には書記だがこのときは英軍将校。ライバルの**デュプレクス**は既に1754年帰国。

この1765年ごろから、【9】は商業活動の他、インド統治機関としての活動も開始する。1813年には対インド貿易独占権が廃止された。1833年にはイギリス議会对中国貿易独占権を廃止、翌1834年に施行されたため、一切の商業活動をやめ、統治機関としての機能のみ残る。東インド会社についてはNo.114でも述べた。

- 2) **ブラッシーの戦い**の7年後、1764年の**ブクサールの戦い**でイギリスは、ムガル帝国、アワド太守、前ベンガル太守のインド側連合軍と戦い、再び勝利した。この勝利で1765年、東インド会社はムガル帝国からベンガル、オリッサ、ビハールでの**租税徴収権**を獲得（ベンガルでは司法権も得た。次第に拡大していった）。ムガル皇帝は単なる年金受領者になり、インドは確定的にイギリスの植民地となった。イギリスは東インドの大部分を**ベンガル管区**に編入、加えてマドラス、ボンベイの3管区に分けて統治した。これらに加え、以下のようにインド内部の強力な抵抗勢力を制圧する戦いに勝利して、諸王国を藩王国として保護下におく等の方法でイギリスの支配下においた。



- ①【12】 **シク教徒との戦い** 1767-69・80-84・90-92・99の4回  
 イギリスとマイソール王国との戦争。  
 ヒンドゥー教地方王権を打倒、南インド支配を確立。
- ②**グルカ戦争** 1774・1814-16の2回 **ネパール**侵略
- ③【13】 **マラータ同盟との戦い** 1775-82・1802-05・1817-18の3回  
 イギリスとマラータ同盟との3回の戦争。ヒンドゥー勢力を打倒。  
 マラータ諸侯同盟軍を打倒、デカン高原、インド中西部の支配権を確立した。
- ④**スリランカ（セイロン）征服**（1815） **オランダ**を一掃。ウィーン会議で領有承認  
 早速、茶のプランテーションが建設された。
- ⑤**ビルマ戦争** 1824-26・52-53・85-86の3回 **インド帝国**に併合された（1886）
- ⑥**シンド地方**を併合し直轄地に（1843）
- ⑦【14】 **シク教徒との戦い** 1845-46・48-49の2回 **対シク教徒**  
 イギリスはシク教徒を打倒、【15】 **アワド**を併合した。09H
- ⑧ **アワド**（アウド、オウド）の**ムスリム**政権を併合（1856）……これをもってイギリスのインド征服ほぼ完了と見なし、インドの植民地化は最終段階（インドの国家主権喪失）に突入していく。

☆19世紀半ばまでに、インド全域がイギリスの支配圏に入った。

第Ⅱ期の3)はNo.149